西アジアにおける最初期の土器について

——普及過程と用途にかんする一試論——

On the Pottery of the Earliest Phases
in Western Asia:

A Tentative Assessment of its Spread and Functions

小 高 敬 寛^{*}
ODAKA Takahiro

ABSTRACT Although Pre-Pottery Neolithic culture developed for a long time without pottery, when pottery-making appeared in Western Asia it expanded rapidly and widely from the beginning. This suggests that social or economic demands for pottery suddenly appeared.

The earliest specimens of pottery in Western Asia are found in the northern Levant, Cilicia, the upper Euphrates and the upper Khabur region. They are identical in many aspects: tempering with minerals, burnishing on the surface, relatively thick walls, and simple vessel shapes, consisting only of bowls whose diameters measure around 20cm.

More sites in these regions yield the succeeding type of pottery. It can be divided into at least two regional groups; the border was probably west of the Euphrates. The western type consists mainly of the so-called Dark-Faced Burnished Ware, and the eastern type consists mainly of chaff-tempered ware.

The emergence of regional varieties makes it harder to discuss the inter-regional relative chronologies because of the difficulty of comparison. Moreover, on the assumption that the functions of pottery would suggest the reasons for its demands, if regional differences indicated different functions of pottery, the regional varieties might be a critical obstacle in the way of explaining why pottery making was expanded rapidly and widely.

But the general presence of *moyen de préhension* (means of gripping), i.e. various handles or applied horizontal bands, across regions could be a clue as to the function of the pottery. Their function seems to have been to allow them to be tied with a cord or gripped by hand. These actions are apparently related to the use of pottery for transportation rather than for cooking, storage or serving. Therefore, at least a part of the early pottery was probably made primarily for transportation, although

* 早稲田大学文学部 助手

Research Associate, School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University

most of it was multi-functions. It is concluded that pottery appeared as containers for transportation, stimulated by the increased production of commodities in established farming communities.

I. はじめに

西アジアでは人びとの定住性が高まった終末期旧石器時代のナトゥーフ文化期を境に、可塑性をもつ原材料としての粘土利用が活発化する。その後、先土器新石器時代までには焼成技術や混和材の利用といった、土器製作に必要な技術的基盤はすでに知られていた (Schmandt-Besserat 1974, 1977a, 1977b)。しかし、その時代名称からも読みとれるように、彼らは本格的な土器生産に入らず、長いあいだ土器を持たないまま新石器文化を開花させていた。ところがその後、いくつかの遺跡で土器製作が恒常化すると、広範な地域の遺跡が瞬く間に追従して土器の生産を開始し、土器新石器時代を迎える。その背景には、何らかの社会・経済的な需要が突然生じたという事情があったに違いない。

なぜ土器が必要になったのかという疑問は、初期の土器が何に使われたのかという問いに直結する。ふつう土器の機能は、貯蔵、調理、運搬、供膳、祭祀というように分類されるが、形状や使用痕など、我われが観察しうる属性からそれを特定することは容易でない。しかし、近年はシリアやトルコにおいて続々と新石器時代の土器資料が増加しており、この集積によって少なくとも土器生産が普及していく過程を描き出すことは可能になってきた。その代表例として、長年にわたって西アジア新石器時代土器研究を牽引しているルミエールらは、土器製作技術の普及過程を三つの段階に整理して説明している (Le Mièrre & Picon 1998)。

筆者は以前にこのルミエールらの説を紹介し、若干の批判的な考察を加えた (小高 2002)。本稿ではこれを受けて、西アジアにおける最初期の土器の普及過程について再検討しつつ通観する。また、さらに一歩進んで、土器需要の要因に迫るための手がかりを探ってみたい。その際、初期の土器に把手や突帯が数多くみられることに着目して考察を試みる。

II. 最古の土器をめぐる

農耕牧畜を生業基盤とする社会が形成された先土器新石器時代の西アジアでは、すでに多彩な粘土利用の証拠がみられる。例えば、イランのザグロス山脈に位置するガンジ・ダレ Ganj Dareh 遺跡のD層 (先土器新石器時代B期) では、スサを混和した日乾レンガ造りの建築物、作りつけの土製貯蔵施設、あるいは未焼成と考えられる土製容器などがみつまっている (Smith 1990)。また、土偶やトークンといった焼成土製品は多くの遺

跡で知られており、ヨルダンのアイン・ガザル 'Ain Ghazal 遺跡などにいたっては、「先土器」新石器時代の堆積から意図的に焼成されたと考えられる土器までもが出土している (Rollefson *et al.* 1992)。同様の例は枚挙にいとまがないものの、この時代の土器は継続的かつ大量に製作されたわけではなく、出土遺物のなかで大きな部分を占めるということもない。この点が土器新石器時代以降の土器製作との決定的な相違である。

ルミエールらは、土器新石器時代の土器における技術的発展の第一段階として、中央アナトリア地域のチャタルホユック Çatalhöyük、北レヴァント地域のラス・シャムラ Ras Shamra およびテル・エル・ケルク Tell el-Kerkh 2号丘、イラン・ルリスタン地方のテペ・グーラン Tepe Guran の4遺跡を事例にあげている (Le Mièrre & Picon 1998)。このうち、チャタルホユック遺跡とテペ・グーラン遺跡は、現在の西アジア新石器時代土器研究の中核をなす北シリアや南東アナトリアから地理的に遠く離れており、周辺遺跡の情報も極めて限られているので、その是非をめぐる検討は非常に難しい。そのうえ、前者の第一段階とされる土器は、ルミエールによる観察が行なわれているだけで具体的な報告がない。したがって、ここでは検討の対象から除外しておく。

彼女らは土器の製作技術の原初的特徴からこの段階を想定している。ラス・シャムラ遺跡では、胎土に大量のスサが混和される「軟質土器 *poterie friable*」がこの段階にあてはまるという。しかし、軟質土器は、後続するはずの暗色磨研土器 *Dark-faced Burnished Ware* と共伴しており (Contenson 1992)、この土器が第二段階の土器より古いことを示す層位学的証拠はみあたらない。

もう一つの事例であるテル・エル・ケルク遺跡2号丘の場合、先土器新石器時代B期

図1 本稿で言及するおもな遺跡の位置

に比定される12～7層の後、6層から確実な土器の出土が認められる（Tsuneki & Miyake 1996; Miyake 2003）。次の5層を含めたこの時期（エル・ルー・ジュ 2a 期）の土器は、器面が暗色を呈し軽く磨かれ、器壁がやや厚く、胎土に小礫の混和された「ケルク土器 Kerkh Ware」（図 2-1～8）が半数弱を占め、残りが暗色磨研土器と粗製土器によって構成される。ルミエールらが第一段階の土器に想定しているのは、このうちの6層にみられるスサを大量に混和した一部の粗製土器であるが（Le Mièrre & Picon 1998: 11-12），調査報告者は他の粗製土器と特に区別していない。また、テル・エル・ケルク遺跡 2号丘 6層出土の粗製土器は全体でもごくわずかであり、数点の土器を特別視することには違和感を覚える。調査報告者が最古の土器の一種としているのはケルク土器の方であり、その理由として4層以降ほとんど消滅してしまうという層位学的事実、および単純な器形や無文などといった特徴をあげている（Miyake 2003: 126）。

近年ではケルク土器に類似した特徴を持つ土器が、各地で相次いでみつまっている。近隣では、テル・アル・ジュダイダ遺跡 Tell al-Judaidah 遺跡出土の暗色磨研土器のうち、「方解石混和赤色胎土 *calcite in red clay*」のものがこれにあたるとする指摘がある

図 2 ケルク土器と「ブラック・シリーズ」

1～8:テル・エル・ケルク 2; 9, 10:アカルチャイ・テベ; 11～14:テル・ハルルー
 (Miyake 2003: Fig. 54; Arimura *et al.* 2000: Fig. 10; Faura & Le Mièrre 1999: Fig. 3)

(Balossi 2004)。この土器が主体的に出土する JK3 区28～26層は、先土器新石器時代の層位に後続してはいないが、地山直上の層位である。また、やや西方に離れたキリキア地域に所在するユムクテペ Yumuktepe 遺跡では、砂粒混和土器 Sandy Ware がやはり地山直上の XXXIII～XXX 層から出土している。これもケルク土器に類するという (Balossi 2004)。

東方のユーフラテス川流域にも事例は多い。アカルチャイ・テペ Akarçay Tepe では、先土器新石器時代に続きIII～I期にわたる土器新石器時代の堆積が確認された (Arimura *et al.* 2000)。もっとも古いIII期では、方解石や雲母を含む砂粒が大量に混和され、器面が磨かれた暗色の土器、いわゆる「ブラック・シリーズ “Black Series”」が出土している (図 2-9, 10)。この土器はテル・ハルラ Tell Halula 遺跡においても出土しており (図 2-11～14)、ファウラらが1～3期に編年した新石器時代の土器群のうち、一番古い1期にとりわけ顕著である (Faura & Le Mièrre 1999)。さらに、クマルテペ Kumartepe 遺跡 (Roodenberg *et al.* 1983) でも少数ながら同様の土器がみられるという (Le Mièrre & Picon 1998: 13, 2003: 185-186; Faura & Le Mièrre 1999: 289)。

また、より東方のハブール川流域に所在するテル・セクル・アル・アヘイマル Tell Seker al-Aheimar 遺跡では、それまで当地最古と考えられてきた原ハッスーナ土器が出土する層より下の層から、黒色鉱物の混和を特徴とする土器がみつまっている (Nishiaki 2001a, 2001b)。これに加えて、「ブラック・シリーズ」のような方解石が混和された土器もわずかながら出土しており、黒色鉱物の混和された土器より古いものであると予想されている (Le Mièrre & Picon 2003: 185)。

これらケルク土器や「ブラック・シリーズ」、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡でみつかった方解石が混和された土器は、ルミエールらのいう土器製作技術の普及過程によると第二段階の前半に位置づけられている (Le Mièrre & Picon 2003)。第一段階としない理由は把握しづらいが、おそらく、土器製作技術発展の初期段階としては技術が高すぎるという判断があるものと思われる。しかし、三宅裕がすでに指摘しているように、先行する粘土利用が長い歴史を有することを考えれば、最古の土器に洗練された技術が用いられていたとしても驚くには値しないだろう (Miyake 2003: 126-127)。存在がきわめて曖昧で同定が困難な第一段階の土器群に比べ、これら一連の土器は鉱物の混和、器面⁽¹⁾のミガキ、やや厚手の器壁、鉢形の単純な器形のみで径20センチメートル内外に集中⁽²⁾する、ほとんど装飾がみられないなどといった共通の技術的特徴が明らかになっており、かつ、どの遺跡でも土器新石器時代の最下層から顕著に出土している。分布範囲に比べると依然として類例の絶対数が乏しいため、技術的特徴の他にも相互の併行関係を補強する証拠の増加が待たれるが (cf. Miyake 2003: 126)、現段階においていえば、西アジア

で本格的に製作される土器として最古の様相を示すと考えられる。

III. 後続する土器

これまで述べてきたような最古の土器が出土する遺跡のほとんどでは、それに後続する土器もまたみつかったりしている。

北レヴァント地域では、テル・エル・ケルク遺跡 2 号丘でいうところのエル・ルージュ 2b 期の土器がこれにあたる (図 3)。基本的に砂粒が混和された胎土をもち、器面が丁寧なミガキで調整され、比較的器壁が薄手であることを特徴とする暗色磨研土器が大多数を占め、スサや鉱物の混和された厚手の粗製土器が少数ながら加わる。同様の事例はテル・アイン・エル・ケルク Tell Ain el-Kerkh 遺跡 (Tsuneki *et al.* 1998)、テル・アル・ジュダイダ遺跡 (Braidwood & Braidwood 1960)、クミナス Qminas 遺跡 (Masuda & Sha'ath 1983)、ラス・シャムラ遺跡 (Contenson 1992)、カラート・エル・ムディーク Qal'at el-Mudiq 遺跡 (Collon *et al.* 1975)、ハマ Hama 遺跡 (Thuesen 1988)、テル・スーカス Tell Sukas 遺跡 (Riis and Thrane 1974) など、同地域内で数多くみられる⁽³⁾。ただし、エル・ルージュ 2b 期はケルク土器の残存、爪形文の多寡、有頸壺の有無などによって細分できる可能性がある (Tsuneki *et al.* 1998: 14)。筆者は今のところとりあえず前二者の特徴、すなわちケルク土器がわずかながら残存し、爪形文をはじめとする押捺系の装飾が盛行する時期を前半、そうでない時期を後半として二分している (小高 2003)。これに従えば、テル・エル・ケルク遺跡 2 号丘 4～3 層とテル・アイン・エル・ケルク遺跡北西区 2～1 層が前半にあたる。また、テル・アル・ジュダイダ遺跡 JK3 区 25 層でも「方解石混和赤色胎土」の暗色磨研土器が残存することなので (Balossi 2004: 113)、前半まで遡るといい。

キリキア地域のユムクテペ遺跡では、XXIX～XXVIII 層がエル・ルージュ 2b 期と比較されている (Balossi 2004)。ただし、資料数が乏しいためにエル・ルージュ 2b 期のような細分は難しいかもしれないが、砂粒混和土器は消失することである (Balossi 2004: 115)。

アカルチャイ・テペ遺跡やテル・ハルーラ遺跡、クマルテペ遺跡⁽⁴⁾が所在するユーフラテス川流域において「ブラック・シリーズ」に後続する土器は、おおむねスサを大量に混和した胎土をもち、器壁は厚めで、器面は軽いミガキで調整されることが多く、装飾がほとんどみられない。類する土器は、シュリユク・メウキ Sürük Mevkii 遺跡 (Stein 1992) やごくわずかながらグリティッレ Gritille 遺跡 (Voigt 1985) から出土しており、さらにその分布は東を流れる支流のバリフ川まで広がっている。バリフ川流域の類例には、ギュルジュテペ Gürcütepe 遺跡 (Beile-Bohn *et al.* 1998)、テル・アスワド Tell

図3 テル・エル・ケルク 2 出土 エル・ルージュ 2b 期の土器
(Miyake 2003: Figs. 55-58)

1～27：暗色磨研土器；28～37：粗製土器

Assouad 遺跡 (図 4 ; Cauvin 1972; Le Mière 1979), テル・ダミシリヤ Tell Damishliyya 遺跡 I 号丘 (Akkermans 1989), テル・サビ・アビヤド Tell Sabi Abyad 遺跡 I 号丘 (Le Mière & Picon 2003: 185) および II 号丘 (Nieuwenhuyse 2001) の出土例があげられ、これらに加えて、表面採集からトゥルル・ブレイラト Tulul Breilat 遺跡やテル・ムンバテ Tell Mounbateh 遺跡においても存在が推測される (Copeland 1979)。

ハブール川流域のテル・セクル・アル・アヘイマル遺跡では、先述のとおり胎土に黒色鉱物が混和された土器が後続する。しかし、今のところ同様の土器は他の遺跡で知られていない。

以上、述べてきた最古の土器に続く土器群は、おおむねルミエールらのいう第二段階の後半のもの⁽⁵⁾と一致する。ただし、北レヴァント地域のテル・アル・ジュダイダ遺跡やキリキア地域のユムクテベ遺跡などは、第二段階とせず次の第三段階に位置づけている (Le Mière & Picon 1998)。その理由はやや不明確で、単にエル・ルー・ジュ 2a 期の土器が第二段階にあたるため、エル・ルー・ジュ 2b 期やそれに併行する土器を第三段階に位置づけているという印象を受ける。しかし、これらの事例はテル・アスワド遺跡やテル・ダミシリヤ遺跡に併行するという指摘もある (Akkermans 1991)。

このような意見の相違がみられる背景には、地域ごとの様相の差異があるといえる。暗色磨研土器で代表される北レヴァント地域やキリキア地域と、スサ混和の土器に代表

図 4 テル・アスワドⅧ層出土土器 (Cauvin 1972: Figs. 1, 2)

されるユーフラテス川流域やバリフ川流域では、出土する土器がまったく異なるので相互の併行関係を比定していくのが極めて難しい。しかも、この時期には、一方の土器が他方の地域に搬入されたために交差年代法が活用できる、といった状況もほとんどみられない。⁽⁶⁾ ルミエールらによれば、土器の地域的特徴の顕在化は第三段階に起こり、いくつかの大きな土器文化圏 *grandes régions céramique* が形成されるとしているが (Le Mièrre & Picon 1998: 15)、これは彼女らが第二段階の後半としたこの時期からみられる現象であるといえよう。その境界は、かつて三宅 (1995) が主張したように、ユーフラテス川の西側に引けそうである。また、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡が所在するハブール川流域についても、他に例をみない土器の存在からまた別の地域と呼べるのかもしれないが、その可否や範囲について判断するにはさらなる資料の増加が必要であろう。

IV. 付属部位をもつ土器

これまで述べてきたように、最古の土器に後続する土器の段階で早くも地域差が出現するという事実は、相対編年を探るうえで大きな障害になっている。また、最初期の土器の需要を考える場合、地域差が土器のおもな用途の相違を示すのならば、急速かつ広範な土器の普及を説明することが難しくなってしまう。ただ、この時期の土器に把手、突帯などの「付属部位 *moyen de préhension*」が頻繁にみられることは (Le Mièrre & Picon 1998: 13)、地域を越えて観察できる特徴である。地域性に左右されないこの特徴を捉えていけば、土器が普及する要因につながるかもしれない。

付属部位をもつ土器の最初の例としては、テル・アル・ジュダイグ遺跡の方解石混和赤色胎土の暗色磨研土器にみられる耳状把手 (Balossi 2004: 116)、アカルチャイ遺跡やテル・ハルラ遺跡の「ブラック・シリーズ」にみられる耳状や半球状の把手 (図 2-10, 11, 14) などがあげられる。しかし、テル・エル・ケルク遺跡のケルク土器にはまったくみられない。

後続する土器の段階になると、把手付きの土器はこれまでにあげたすべての遺跡で出土している。半球状の粘土塊を貼付し穿孔を施したものや、縦方向にループを描くもの、耳状の突起を横方向に貼付したものが多い。半球状の把手は人の指が通るほど大きく穿孔されていないので、紐や縄を通すためのものと考えられる。

また、粘土帯を横方向にめぐらせた突帯もこの時期に現われる。出土する遺跡は把手に比べると若干限られ、北レヴァント地域では頻出するものの⁽⁷⁾、ユーフラテス川以東ではアカルチャイ・テベ遺跡、テル・ハルラ遺跡、ギェルジュテベ遺跡、テル・アスワド遺跡などにみられるだけである。しかも、ユーフラテス川以東では以後の時期に類例

がみられないのに比べ、北レヴァント地域ではハラフ期に入るあたりまで残存する。したがって、突帯は西方の地域的特徴をなすのかもしれない。しかし、ユーフラテス川以東でも最古段階の土器が出土する遺跡のほとんどでみられるという現象は、注目に値するだろう。

なぜ突帯が付けられるのかという問いには、二つの答えが考えられそうである (cf. 小高 2003: 註 4)。一つは、手で持ち上げたり、紐や縄などを巻きつけたりするのに便利であるという、実用的な機能を想定する考え方である。ルミエールらはこの見方を支持しているようだ (Le Mièrre & Picon 1998: 13)。もう一つは、装飾的効果をねらったものという考え方である。実際、突帯には刻み目を入れたり、貼付文を付加したりする例が数多く見受けられる (e. g. Braidwood & Braidwood 1960: Figs. 21, 27; Masuda & Sha'ath 1983: Pl. 5; Faura & Le Mièrre 1999: Fig. 4)。

この問題を検討するにあたって、テル・エル・ケルク遺跡 2 号丘とこれに隣接するテル・アイン・エル・ケルク遺跡の事例をとりあげてみたい。⁽⁸⁾ 両遺跡出土の土器資料を合わせると、土器の初現期 (エル・ルージュ 2a 期) からエル・ルージュ 2b 期, 2c 期を経て、ハラフ前期併行期 (エル・ルージュ 2d 期) にいたるまでの断続的なシーケンスが得られる。このうち、突帯をもつ土器はエル・ルージュ 2b 期から 2c 期の層位において多数出土している。エル・ルージュ 2b 期の土器については三宅裕が概ね報告しており (Miyake 2003; Tsuneki *et al.* 1998), エル・ルージュ 2c 期の土器については現在筆者らが整理・分析中である (cf. Tsuneki *et al.* 1997, 1998, 1999, 2000)。両時期の土器は、いずれもおよそ 80~90 パーセントを占める暗色磨研土器と少数の粗製土器で構成される。エル・ルージュ 2b 期において、突帯が顕著にみられるのは数少ない粗製土器の方であるようだ。テル・エル・ケルク遺跡 2 号丘の報告では、突帯付きの暗色磨研土器が 2 点あげられているのに対し、突帯付きの粗製土器は 5 点を数える (図 3-15, 16, 28~32)。また、テル・アイン・エル・ケルク遺跡の概報では、突帯付きの暗色磨研土器は図版にあげられておらず、粗製土器のものだけが掲載されている (Tsuneki *et al.* 1998: Fig. 11)。ところが、エル・ルージュ 2c 期になるとこの傾向は逆転する (図 5)。現在までの暫定的な概算値ではあるが、暗色磨研土器の 6 パーセント程度、粗製土器の 2 パーセント程度に突帯が貼付されることがわかっている。ただ、暗色磨研土器の突帯は粗製土器のそれに比べて厚みがなく、やもすると見落としてしまいかねないようなものが多い。また、テル・アイン・エル・ケルク遺跡において、エル・ルージュ 2b 期では暗色磨研土器の 34 パーセントに装飾がみられるが (Tsuneki *et al.* 1998: 12), エル・ルージュ 2c 期では突帯を装飾として含めても 10 パーセント前後であり、装飾に含めないとその半分にも満たない。そして、突帯がほぼ消滅してしまうエル・ルージュ 2d 期には、装飾がふたたび盛行

図5 テル・アイン・エル・ケルク出土 エル・ルージュ 2c 期の突帯付き土器
(Tsuneki *et al.* 1998: Fig. 12, 1999: Fig. 6)
1～4：暗色磨研土器；5，6：粗製土器

する。

以上の様相をどのように捉えるかは、意見の分かれるところかもしれない。しかし、突帯は装飾の乏しいエル・ルージュ 2c 期の暗色磨研土器によくみられ、しかも薄く目立たない粘土帯が用いられることから、あまり装飾性を帯びているとはいえないだろう。したがって、突帯は実用的な機能をもつ部位であった可能性が高い。エル・ルージュ 2b 期に主として粗製土器に伴うものとして現われ、同時に暗色磨研土器にも付加されたが、2c 期には粗製土器に比べ小型で軽量の暗色磨研土器にだけ貼付されるようになった結果、手を深く掛けられるような厚い突帯を必要としなくなった、という過程も一つの仮説として描くことができる。これを他の遺跡に普遍化するのは尚早だが、十分に示唆的な様相といえる。

V. 最初期の土器の用途

最初期の土器に、実用的な機能をもっていたであろう把手や突帯が数多くみられるという現象は、その用途、ひいては需要の要因を探るうえで大きな意味をもつ。把手や突帯の存在からは、手で持ち上げる、指で握む、紐や縄を結びつける、もしくは巻きつける、といった行為が想像できる。こうした行為は、土器の一般的な機能として初めにあげた貯蔵、調理、運搬、供膳、祭祀のうち、どれに関連するのであろうか。

貯蔵に用いたならば、布などで蓋をし、紐で縛るという行為が予想できる。しかし、

指で握むためのループ状の把手などはあまり必要であると思えない。そもそも、初現期の土器は径20センチメートル内外の大きさに集中する。このような小型の土器が貯蔵を目的として製作されたとは考えにくい。

調理用土器の場合、把手の付加は後の時期にもよくみられる。しかし、紐や縄を通してであろう半球状の把手は、どのように利用されたのだろうか。天井などから吊り下げることが考えられなくもないが、加熱されることを考慮するとやや疑問が残る。

供膳に使われる土器に手で持ち上げたり指で握んだりするための把手が付くことは、とりわけ飲用に供する場合、有り得るだろう。しかし、供膳用土器は比較的特別な性質を示さず、少なくとも部分的には他の容器で難なく代用できてしまし (Le Mière & Picon 1998: 22)、紐や縄を通して使用する状況は想像しがたい。

また、祭祀用土器は、その技術的・形態的特徴より、出土状況などの検討から決定されるべきものであろう。

もっとも関連がありそうなのは運搬機能である。手で持ち上げたり、指で握んだりといった行為は土器の移動に直結する。実際、アンフォラをはじめ後世の交易用土器に把手がよくみられることは周知の事実である。また、運搬時に布などで蓋をしたり、紐や縄で何かに吊り下げるといった行為も、内容物の保護や省力化の観点から想像に難くない。

把手や突帯の存在から比較的想像しやすい土器の機能は運搬であり、それらが最初期の土器に広くみられるという事実は、運搬用容器の需要に応える形で土器が普及したのではないかという仮説を導き出す。土器が広範に普及する時期の背景には、農耕社会の完成と大規模な牧畜、もしくは遊牧の開始が一般にあげられている (e.g. Moore 1995; Le Mière & Picon 1998)。この時期には先土器新石器時代B期以来の巨大な農耕集落が存在し、これを維持するためにはそれなりに複雑な物資管理が必要であっただろう。また、牧畜に伴う人びとの移動は広範な文化の交流・拡散をもたらしたに違いない。こうした状況のなかで、モノの動きをより活発化させる必要性が生じたとは考えられないだろうか。

しかし、昨今では初期の土器の用途を多元的に捉える傾向が看取される。例えば、ムーアは精製土器を供膳用、粗製土器を貯蔵用、無頸壺などの多くを調理用と想定している (Moore 1995: 46-48)。また、ルミエールらは土器が調理に使われた可能性を模索しながらも、他の用途に使われた土器の存在を積極的に認め、むしろ多用途の土器から調理用・非調理用に機能分化していくさまを捉えようとしている (Le Mière & Picon 1994, 1998, 2003)。無論、すべての土器が付属部位をもつわけではないので、最初期の土器が運搬のためだけに製作されたとはいえない。したがって、多元的な用途を否定するつもりは毛

頭ないが、運搬を主目的とした土器が各地で製作されたという予測は可能であろう。ただし、この段階の土器が遠隔地に多数搬入されている証拠は乏しく、土器が比較的小型であることにも注意を向ける必要がある。運搬用土器とはいっても、長距離の交換や交易に使われたと想定するより、遺跡内や近隣との間で往来していたと考えるのが妥当かもしれない。

VI. おわりに

以上、最初期の土器の普及過程について再検討し、浮かび上がった付属部位の問題にふれ、そこから土器の用途にかんする考察を試みた。以前にも筆者は新石器時代の土器の用途について、雑駁ながらザグロス山麓域をはじめとする東方ではおもに貯蔵、北レヴァント地域をはじめとする西方ではおもに運搬、と述べたことがある（小高 2001）。これは、東方では大型の重い土器が発達していくことと比較し、西方において土器の胎土が精良化し器壁が薄くなっていく現象を運搬に適した変化とみなした結果である。東方で大型の土器が発達するのは本稿でとりあげた時期より後のことであるので、時間幅を考慮せねばならないが、本稿における考察結果は少なくとも西方の様相を支持するものとなった。

言うまでもないが、最初期の土器をめぐる議論はその折々の「最古の土器」に大きく左右される。これからも新たな発見があるに違いない。しかし、それは既知の資料との比較があったうえで俎上に載せられるべきであり、そのためには現存の土器をさまざまな側面から検討しておく必要があろう。今回は付属部位に着目したが、今後は他に注視すべき属性を探索し、多角的な考察を試みたい。

また、それ以上に重要なのは、土器の普及を社会的・文化的なコンテクストに位置づけていくことだろう。先述のように、土器が広範に普及する時期の背景には、農耕社会の完成と大規模な牧畜、あるいは遊牧の開始という、人類にとって重大な社会経済的な変化があった。一方で、先土器新石器時代からの連続した堆積をもつ遺跡において、土器の出現する層位で他の遺構・遺物に大きな変化がないのも事実である（Le Mièrre & Picon 1998: 22）。この関係性の解釈こそが、西アジアにおける土器普及の要因を読み解く最大の鍵なのかもしれない。

本稿をまとめるにあたって、多くの方々にご助言をいただき、浅学な筆者との議論にお時間を割いていただいた。常木晃先生、三宅裕先生、西秋良宏先生、マリールミエール先生、フランチェスカ・パロッシ女史、オリフィエ・ニューエンハイス氏のお名前は特にあげさせていただくことをお許し願いたい。また、藤本強先生、小泉龍人先生には

日頃よりご指導いただいている。無論、本稿についてすべての責任は筆者にあるが、以上の方々には深くお礼申し上げたい。

なお、本稿の内容は早稲田大学2003年度特定課題研究助成費（課題番号 2003A-037）の助成による研究成果を含む。

注

- (1) テル・エル・ケルク遺跡 2 号丘のケルク土器が10ミリメートルを超える程度、テル・アル・ジュダイダ遺跡の方解石混和赤色の暗色磨研土器が8～12ミリメートル、ユムクテベ遺跡の砂粒混和土器が8～15ミリメートルという報告がある（Miyake 2003: 121; Braidwood & Braidwood 1960: 49; Balossi 2004: 115）。
- (2) テル・エル・ケルク遺跡 2 号丘のケルク土器は14～16センチメートルに集中し、テル・アル・ジュダイダ遺跡の方解石混和赤色の暗色磨研土器は約26センチメートルであるという報告がある（Miyake 2003: 121-122; Braidwood & Braidwood 1960: 49）。また、「ブラック・シリーズ」は報告された図版によると、アカルチャイ・テベ遺跡で11～25センチメートル程度、テル・ハルーラ遺跡で15～20センチメートル程度を測る（Arimura *et al.* 2000: Fig. 10; Faura & Le Mière 1999: Fig. 3）。
- (3) 他に、テル・ダハブ Tell Dhahab 遺跡がテル・アル・ジュダイダ遺跡と同じアムークA期の層位をもっているとされるが、北レヴァント地域における新石器時代土器の編年を検討した三宅裕は、テル・ダハブ遺跡のアムークA期をテル・アル・ジュダイダ遺跡のそれと同一視せず、やや新しいエル・ルージュ 2c 期前葉に併行するとしている（三宅 1997）。また、テル・アレイ Tell Aray 遺跡 2 号丘11～5 層についても、概報の段階ではエル・ルージュ 2b 期に比定されているが（常木 1993; Iwasaki *et al.* 1995; 三宅 1997）、調査・分析担当者内ではエル・ルージュ 2c 期とする意見もあるようだ（常木晃氏私信）。以上の2遺跡については除外しておいた。
- (4) クマルテベ遺跡の場合、方解石を混和した「ブラック・シリーズ」に類する土器は、スサ混和の土器を主体に共伴する形で出土している（Roodenberg *et al.* 1983: 5-6）。したがって、ルミエールらは第二段階の前半から後半への移行の様相を示唆している（Le Mière & Picon 2003: 185-186）。層位学的な情報が不完全で時期差を内包している可能性も否定できないが、とりあえずはルミエールらの想定どおり、本稿における最古の土器群から後続する土器群への移行段階として捉えるのが無難であろう。
- (5) ルミエールらが第二段階に含めている類例には、他にチャタルホユック遺跡、テル・マガザリヤ Tell Magzalia 遺跡、ギニグ Ginnig 遺跡、テベ・グーラン遺跡のものがある。しかし、これらが実際に他の第二段階の土器と編年的に対応するのか否かは、資料数の制約もあり判断しがたい。
- (6) ただし、これに遡るアカルチャイ・テベ遺跡やセクル・アル・アヘイマル遺跡出土の方解石を混和した土器を搬入品とみる意見がある（Le Mière & Picon 2003:

185)。また、北レヴァント地域に特徴的なウオッシュの施された押捺文土器 Washed Impressed Ware が、ユーフラテス川流域のアカルチャイ・テベ遺跡に搬入された可能性を指摘する例もある (Miyake 2003: 127)。いずれにせよ、この時期に北レヴァント地域とユーフラテス川以東の間に土器の移動があったという事実は、今のところあまり明瞭ではない。

- (7) ただし、ハマ遺跡では今のところ報告されていない。
- (8) 両遺跡は、さらにテル・エル・ケルク遺跡 1 号丘を加えてテル・エル・ケルク遺跡という複合遺跡を構成している。テル・エル・ケルク遺跡 2 号丘でエル・ルージュ 1, 2a, 2b 期, テル・アイン・エル・ケルク遺跡でエル・ルージュ 1, 2b, 2c, 2d 期の文化層がそれぞれ発掘されている。

引用文献

- Akkermans, P. M. M. G. 1989: "The Soundings at Tell Damishliyya," in M. N. van Loon (ed.), *Hammam et-Turkman I: Report on the University of Amsterdam's 1981-84 Excavations in Syria*, Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut te Istanbul, Istanbul, 19-67.
- Akkermans, P. M. M. G. 1991: "New Radiocarbon Dates for the Later Neolithic of Northern Syria," *Paléorient* 17/1, 121-125.
- Arimura, M., N. Balkan-Atlı, F. Borell, W. Cruells, G. Duru, A. Erim-Özdoğan, J. Ibanez, O. Maeda, Y. Miyake, M. Molist & M. Özbaşaran 2000: "A New Neolithic Settlement in the Urfa Region: Akarçay Tepe, 1999," *Anatolia Antiqua* 8, 227-255.
- Balossi, F. 2004: "New Data for the Definition of the DFBW Horizon and Its Internal Developments: The Earliest Phases of the Amuq Sequence Revisited," *Anatolica* 30, 109-149.
- Beile-Bohn, M., C. Gerber, M. Morsch & K. Schmidt 1998: "Neolithische Forschungen in Obermesopotamien Gürcütepe und Göbekli Tepe," *Istanbuler Mitteilungen* 48, 5-78.
- Braidwood, R. J. & L. S. Braidwood 1960: *Excavations in the Plain of Antioch I: The Earlier Assemblages Phases A-J*, The University of Chicago Oriental Institute Publications 61, The University of Chicago Press, Chicago.
- Cauvin, J. 1972: "Sondage à Tell Assouad (Djezireh, Syrie)," *Les Annales Archéologiques Arabes Syriennes* 22, 85-103.
- Collon, D., C. Otte, M. Otte & A. Zaqzouq 1975: *Sondages au Flanc Sud du Tell de Qal'at el-Mudîq*, Fouilles d'Apaée de Syrie, Miscellanea, Fasc. 11, Bruxelles, Brussel.
- Contenson, H. de 1992: *Préhistoire de Ras Shamra: Les Sondages Stratigraphiques de 1955 à 1976*, Ras Shamra-Ougarit 8, Éditions Recherche sur les Civilisations, Paris.

- Copeland, L. 1979: "Observations on the Prehistory of the Balikh Valley, Syria, during the 7th to the 4th Millennia BC," *Paléorient* 5, 251-275.
- Faura, J.-M. & M. Le Mière: 1999: "La Céramique Néolithique du Haut Euphrate Syrien," in G. del Olmo Lete & J.-L. Montero Fenollós (eds.), *Archaeology of the Upper Syrian Euphrates, the Tishrin Dam Area*, Institut del Pròxim Orient Antic, Universitat de Barcelona, Barcelona, 281-298.
- Garstang, J., W. J. Phythian-Adams & V. Seton-Williams 1937: "Third Report on the Excavations at Sakje-Geuzi, 1908-1911," *University of Liverpool Annals of Archaeology and Anthropology* 24, 119-141.
- Iwasaki, T., H. Nishino & A. Tsuneki 1995: "The Prehistory of the Rouj Basin, Northwest Syria. Preliminary Report," *Anatolica* 21, 143-187.
- Le Mière, M. 1979: "La Céramique Préhistorique de Tell Assouad. Djezireh, Syrie," *Cahier de l'Euphrate* 2, 4-76.
- Le Mière, M. & M. Picon 1994: "Early Neolithic Pots and Cooking," in R.-B. Warke (ed.), *Handwerk und Technologie im Alten Orient*, Philipp von Zabern, Mainz, 67-70.
- Le Mière, M. & M. Picon 1998: "Les Débuts de la Céramique au Proche-Orient," *Paléorient* 24/2, 5-26.
- Le Mière, M. & M. Picon 2003: "Appearance and First Development of Cooking and "Non-cooking" Ware Concepts in the Near East," in S. Di Pierro, V. Serneels & M. Maggetti (eds.), *Ceramic in the Society: Proceedings of the 6th European Meeting on Ancient Ceramics*, Department of Geosciences, Mineralogy and Petrography, Universitas Friburgensis, Fribourg, 175-188.
- Masuda, S. & S. Sha'ath 1983: "Qminas, the Neolithic Site near Tell Deinit, Idlib (Preliminary Report)," *Les Annales Archéologique Arabes Syriennes* 33, 199-231.
- Miyake, Y. 2003: "Pottery," in T. Iwasaki & A. Tsuneki (eds.), *Archaeology of the Rouj Basin: A Regional Study of the Transition from Village to City in Northwest Syria, vol. I*, Al-Shark 2, Department of Archaeology, Institute of History and Anthropology, University of Tsukuba, Tsukuba, 119-141.
- Moore, A. M. T. 1995: "The Inception of Potting in Western Asia and Its Impact on Economy and Society," in W. K. Barnett & J. W. Hoopes (eds.), *The Emergence of Pottery: Technology and Innovation in Ancient Societies*, Smithsonian Institution Press, Washington/London, 39-53.
- Nieuwenhuys, O. 2001: "Early Pottery: the Ceramics from Level 1," in M. Verhoeven & P. M. M. G. Akkermans (eds.), *Tell Sabi Abyad II: the Pre-pottery Neolithic B Settlement*, Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut te Istanbul, Istanbul, 123-135.

- Nishiaki, Y. 2001a: "Tell Seker al-Aheimar, the Upper Khabur, Syria: the 2000 Season," *Orient-Express* 2001/2, 35-37.
- Nishiaki, Y. 2001b: "The PPN/PN Settlement of Tell Seker al-Aheimar, the Upper Khabur, Syria: the 2001 Season," *Neo-Lithics* 2/01, 8-10.
- Riis, P. J. & H. Thrane 1974: *Sûkās III: The Neolithic Periods*, Publications of the Carlsberg Expedition to Phoenicia 3, Munksgaard, København.
- Rollefson, G. O., A. H. Simmons & Z. Kafafi 1992: "Neolithic Cultures at 'Ain Ghazal, Jordan," *Journal of Field Archaeology* 19, 443-470.
- Roodenberg, J. J., T. J. Wilkinson & S. Bayri-Baykan 1984: "Surveys and Soundings at Kumartepe: An Interim Report," *Anatolica* 11, 1-16.
- Schmandt-Bessrat, D. 1974: "Use of Clay Before Pottery in Zagros," *Expedition* 16/2, 11-17.
- Schmandt-Bessrat, D. 1977a: "The Earliest Uses of Clay in Syria," *Expedition* 19/3, 28-42.
- Schmandt-Bessrat, D. 1977b: "The Beginnings of the Uses of Clay in Turkey," *Anatolian Studies* 27, 133-150.
- Smith, P. E. L. 1990: "Architectural Innovation and Experimentation at Ganj Dareh, Iran," *World Archaeology* 21/3, 323-335.
- Stein, G. 1992: "Archaeological Survey at Sürük Mevkii: A Ceramic Neolithic Site in the Euphrates River Valley, Southeast Turkey," *Anatolica* 18, 19-32.
- Thusen, I. 1988: *Hama, Fouilles et Recherches de la Fondation Carlsberg 1931-1938: I. The Pre- and Protohistoric Periods*, Nationalmuseet, København.
- Tsuneki, A. J. Hydar, Y. Miyake, S. Akahane, T. Nakamura, M. Arimura & S. Sekine 1997: "First Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (1997), Northwestern Syria," *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 18, 1-40.
- Tsuneki, A. J. Hydar, Y. Miyake, S. Akahane, M. Arimura, S. Nishiyama, H. Sha'baan, T. Anzeaki & S. Yano 1998: "Second Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (1998), Northwestern Syria," *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 19, 1-40.
- Tsuneki, A., J. Hydar, Y. Miyake, M. Hudson, M. Arimura, O. Maeda, T. Odaka & S. Yano 1999: "Third Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (1999), Northwestern Syria," *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 20, 1-36.
- Tsuneki, A. J. Hydar, Y. Miyake, O. Maeda, T. Odaka, K. Tanno & A. Hasegawa 1998: "Fourth Preliminary Report of the Excavations at Tell el-Kerkh (2000), Northwestern Syria," *Bulletin of the Ancient Orient Museum* 21, 1-30.
- Tsuneki, A. & Y. Miyake 1996: "The Earliest Pottery Sequence of the Levant: New Data from Tell el-Kerkh 2, Northern Syria," *Paléorient* 22/1, 109-123.

- Voigt, M. M. 1985: "Village on the Euphrates: Excavations at Neolithic Gritille in Turkey," *Expedition* 27/1, 10-24.
- 小高敬寛 2001: 「近東における土器の普及——北レヴァントおよびザグロス山麓地域を中心に——」(平成12年度早稲田大学史学会大会発表要旨)『史観』144, 136-138.
- 小高敬寛 2002: 「北レヴァントおよび北メソポタミアにおける土器使用の普及をめぐって」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』47/4, 113-121.
- 小高敬寛 2003: 「北シリア新石器時代における土器装飾の変遷——ルージュ盆地とバリフ川流域を例に——」『西アジア考古学』4, 55-66.
- 常木晃 1993: 「エル・ルージュ盆地の編年試案」岩崎卓也, 西野元 (編)『エル・ルージュ盆地における考古学的調査Ⅲ』筑波大学シリア考古学調査団報告3, 筑波大学歴史・人類学系, 63-69.
- 三宅裕 1995: 「土器の誕生」常木晃, 松本健 (編)『文明の原点を探る——新石器時代の西アジア』同成社, 東京, 97-115.
- 三宅裕 1997: 「西アジア暗色磨研土器の研究 (Ⅱ)」『筑波大学先史学・考古学研究』8, 31-60.